

# 川井クリニック

(茨城県つくば市)

洗練されたチームプレイ



## Clinic Report



### 川井クリニック

1996年に開業。糖尿病をはじめとする高脂血症、高血圧症、痛風、骨粗鬆症、甲状腺疾患、成長障害などの代謝疾患・内分泌疾患を専門とする。地域に根ざした質の高い医療を提供していることで知られる。



### 川井 紘一 Kawai Koichi

1943年前橋市生まれ。68年東京医科歯科大学医学部卒業。73年同大学院（生化学）修了。74年より同大学医学部で研修を受け、76年に東京女子医科大学内分泌内科で内分泌代謝疾患について学び、77年より筑波大学臨床医学系内科（内分泌・代謝部門）に赴任。以降同大学に95年まで勤務。96年に川井クリニックを開業。

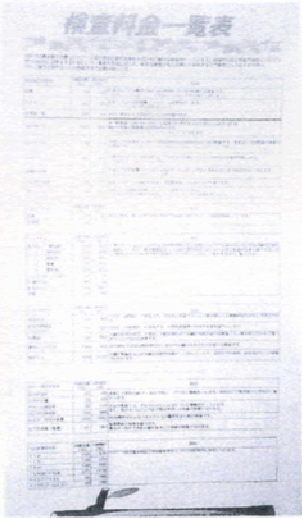
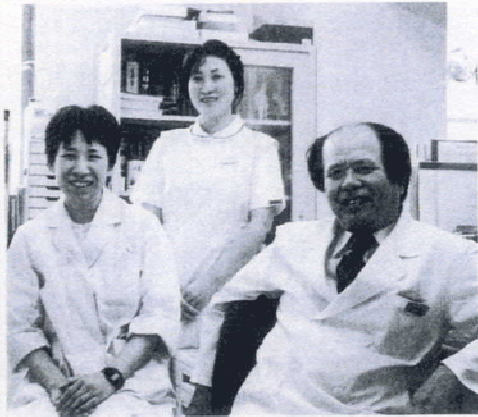
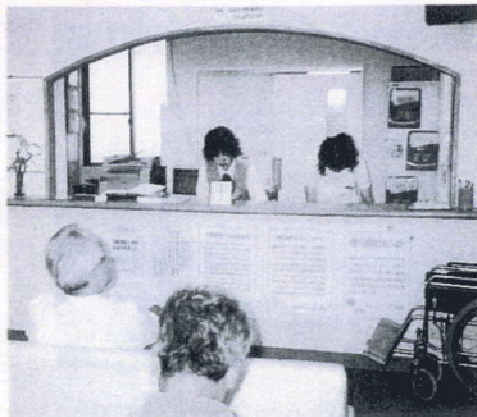
1996年（平成8年）に開設された、茨城県つくば市の川井クリニックは、糖尿病をはじめとする代謝内分泌疾患と生活習慣病の診療を専門にした診療所です。糖尿病の通院患者は、つくば市とその周辺地域に住む比較的若い方が多く、現在、約1,300名。1日平均で、およそ70名になります。スタッフ構成は、院長の川井先生を筆頭に、非常勤の医師1名、看護師5名、管理栄養士1名、薬剤師1名、臨床検査技師1名、事務3名と充実しています。チーム医療のメリットを最大限に生かし、短い診療時間の中でも、患者さんに全員が目を配ることによって、治療中断率9%という好成果を残しているのが大きな特徴です。

### 徹底的な情報提供

どこの診療所でも、待合室の壁にはいろいろな案内やお知らせが貼ってありますが、検査料金の一覧まで貼ってあるのは、川井クリニックくらいのものでしょう。徹底的に情報を公開する川井クリニックの姿勢をよく表しているといえます。

まず、初診の待ち時間に看護師が患者に手渡すのがQ&Aシートです。ここには、「どんな検査があるのか?」「薬について知りたい時はどうすればいいか?」など、初診患者にとって気になる質問を想定して、あらかじめ答えた文章が載っています。わかりやすい解説で、診療への不安を取り除いてくれます。

次に、通院が始まって患者に渡されるのが、オリジナルの「健康手帳」です。手帳といっても、A4サイズのクリアファイルで、中には糖尿病やその合併症、高血圧、高脂血症などの幅広い基礎



受付・待合室

陽光が差し込み、落ち着いた雰囲気が漂う。

診察室

左から、井川医師、菅原師長、川井院長。

糖尿病療養手帳



川井クリニック

主治医はあなただけです

年・月・日	検査項目	結果	医師
	血糖		
	HbA <sub>1c</sub>		

眼科所見

検査項目	検査結果
点状出血	+
網膜血管の拡張	+
網膜血管の狭窄	+
新生血管	+

血糖コントロールのめやす

項目	目標値	許容範囲	許容範囲
空腹時血糖	100未満	120未満	150未満
食後2時間血糖	140未満	160未満	180未満
HbA <sub>1c</sub>	6.5未満	7.0未満	7.5未満

↑ 料金一覧表  
待合室の壁  
に貼ってあ  
る。

← 糖尿病療養  
手帳  
検査記録が  
確認でき、  
役立つ情報  
も満載。

知識を解説したシートや、服用している薬の写真、飲み方、注意点の説明など、必要な情報がすべて網羅されています。検査結果の記録用紙も入り、空いたページには、健康についての記事やパンフレットなども挟めるようになっています。

また、アンケート調査をもとに独自に作成したポケットサイズの「糖尿病療養手帳」も渡されます。ここには、5年分のHbA<sub>1c</sub>値や眼底所見が詳細に記録できるようになっていて、患者さんが自分の検査値や変化を確認でき、「気づき」の効果もあります。病気に関する一口メモも充実していて、便利な手帳となっています。

印刷物ばかりではなく、インタラクティブメディアを利用した情報提供も行っています。待合室にはタッチパネル方式の液晶画面が設置されていて、ゲーム感覚で必要な情報がいつでも得られる

ようになっています。  
このように徹底した情報提供を、患者さんはきちんと利用しているのでしょうか。情報過多で消化不良を起こすことはないのでしょうか。川井先生はこう答えます。「患者を甘く見てはいけない。一生とか、20年とか病気の期間は長いのだから、何ページあっても、読む人はじっくり読んでいますよ」。筑波学園都市という場所柄、インテリ層が多いのも、情報が受けとめられている理由のひとつでしょう。

できる限り経口薬でねばる

川井クリニックは、他の医院と比べてインスリン導入の患者が少ないという特徴があります。これは「経口薬でねばれるところまで、ねばる」と



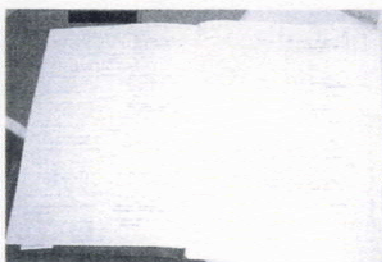
個人相談室

管理栄養士の酒井さんによる食事指導。



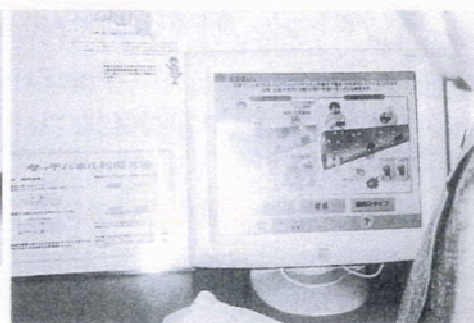
食品展示

フードモデルではなく、実物の食品を展示。



カルテ

患者情報がびっしり書き込まれている。



タッチパネル情報サービス

キーボードを使わずにできるので、どんな患者にも簡単に利用できる。

薬局

薬剤師の清水さんが調剤。院内での調剤も川井クリニックの特色である。

いう治療方針の現れでもあります。「患者さんが、コンファタブルに生きることをテーマにしています。たとえインスリン療法にするとしても、患者さんが、無理にインスリンにされてしまったと感じるようなかたちでは導入したくない。医者側の、経口薬でできるだけことはする」と川井先生は言います。また、経口薬とインスリン治療の予後の違いを、概念ではなく、エビデンスとして示すだけのデータがまだないのも、インスリンに安易に移行しない理由だそうです。

### 医師も看護師も栄養士も共通のカルテ

川井先生が筑波大学出身ということもあり、川

井クリニックでは筑波大学と同じように、スタッフと医師が共通のカルテを使用する方式を行っています。実際、カルテには、スタッフらのさまざまな筆跡で「アルコールだけは楽しみだから止められない」、「運動はやっていない。ゴルフ月1回くらい」など、患者さんの告白が、細かく書き込んであります。書き込みのほとんどは、採血中に看護師が聞き出したものや、栄養指導中に栄養士が聞き出したものです。これが一種の予診になっているので、川井先生は、短い診療時間の中でも、カルテを見て患者の状況をすぐに把握し、ポイントを的確に押さえた指導ができます。



川井クリニックの医療スタッフ

### CoDiC を積極的に活用

糖尿病診療支援ソフト「CoDiC」を積極的に活用しているのも、川井クリニックの特色です。富山医科薬科大学が中心となって開発されたこのソフトは、患者のさまざまなデータを打ち込んでデータベースを構築するソフトです。川井クリニックでは、スタッフが分担制で、細かい項目まで入力しています。入力の手間はかかりますが、そのぶんメリットも多いようです。

例えば、データ項目の1つに、「患者が来院しなくなった理由」という項目があります。そこには、転居、転院、死亡など、患者ひとりひとりについて、来院をやめた理由が明らかになっています。理由が明らかになることは、逆に、理由不明の中断者の存在もはっきりしてくるわけです。すると看護師さんたちは、定期的に直接電話をかけて追跡し、その患者さんがどこの病院にも行っていない場合、検査や受診を続けることの大切さを話して説得します。こういうきめの細かい配慮も「すべての患者さんに関して、動向を把握しているからできること」だと、師長の菅原さんは言います。

### チームプレイにはコンセプトが大切

医師とスタッフが有機的なチームプレイをするには、「何よりもコンセプトが大切だ」と川井先生は言います。スタッフ全員が、各自アドリブで動くのではなく、共通した1つのコンセプトに沿って専門能力を発揮してこそ、チームプレイといえるからです。川井クリニックでは、週2回の全員ミーティング（勉強会）をこれまで8年間欠かさず続けてきました。そのおかげで、今では口に出さなくとも、スタッフ全員にそのコンセプトが染み込んでいると川井先生は頷きます。

暗黙のうちに全員が理解し合うコンセプトを一言で説明するのは困難でしょう。ちなみに管理栄養士の酒井さんが採用される際に、川井先生から「栄養相談室を出る時、患者さんの肩がうなだれることなく、糖尿病であっても、元気を与えて帰してくれ」と言われたそうです。栄養指導に限らず、クリニック全体に共通するコンセプトとは、この言葉に象徴されるような、患者に元気と希望を与える医療ではないかと思いました。

(安谷一人)